

# 東京都心部の中小河川における 名所の変遷と特質に関する研究

A Study on the transition and characteristics  
in famous scenic places along small rivers in the central Tokyo

伊地知 大輔<sup>1</sup>・佐々木 葉<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 修士（工学）日本技術開発株式会社  
（〒164-8601 東京都中野区本町5-33-11）

E-mail:ijichi-da@jecc.co.jp

<sup>2</sup>正会員 博士（工学）早稲田大学理工学部社会環境工学科  
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1）

E-mail:yoh@waseda.jp

This study aims to clarify the transition and characteristics in people's preference for scenes along small and middle size rivers in central Tokyo by investigating the drawings and/or photographs selected as the anthologies of famous scenic places ( Meisho-zue or Hyakkei) since Meiji era to the present. Main results are as follows: Both the number of the scenes and sites of the scenic river places have decreased. Interested elements in the scenes differ in the periods of Meiji era, before and after the World War II. Some places have been regarded as the scenic places through the periods but the views for them have changed. There are 7 types of drawing the river site views. The author also examines factors of the transition of them collating the environmental changes of the sites.

**Key Words :** River-scape, famous scenic place, modern period, Tokyo

## 1. 研究の背景と目的

### (1) 背景と目的

1980 年代以降、我が国では都市河川を対象とした都市論や景観論，設計や計画論の研究<sup>1)</sup>と，その実践例<sup>2)</sup>が蓄積されてきたと思われる．しかしこと東京においては，神田川に代表されるような都心部中小河川の風景について具体的な考察がなされているとは言い難い．本研究では河道に空間的余裕がなくデザインの制約が大きい東京都心部中小河川の景観の特質を探り，都市におけるその景観的な意味を考えたい．

何故ならば，変化し続ける都市空間にあって，川は昔から在り続け，都市に住む人間はそうした川とそれぞれの時代において必要とされる付き合い方をしており，中小河川の景観はその結果として現れていると考えられるためである．さらに，そうした中小河川の景観認識の特質を時間的変遷として把握し，そのなかに読み取られる価値や評価を探ることで，現代の中小河川の景観に対する我々の見方を再認識するとともに洗練させていくことに繋がるのではないかと考えるためである．

以上の考えに基づき，本研究では，明治以降から現代までに刊行された名所図会・百景に採録された東京都心部の中小河川の絵図を分析対象とし，その特質と変化を時代的に把握することを目的とする．そしてそこから明らかになった名所の変遷に対して，その要因の分析を試み，現代の中小河川へ示唆を得る．

### (2) 研究の位置付け

本研究に関連する既存研究は，以下の 3 つに大別できる．

#### a) 江戸・東京の水辺空間の変遷に関する研究

江戸および東京の水辺空間の変遷に関する研究としては，代表的なものとして鈴木<sup>3)</sup>や法政大学大学院エコ地域デザイン研究所<sup>4)</sup>によるものがある．これらによって東京の都市空間における水辺の重要性が明らかにされている．

#### b) 江戸の名所の水辺景観に関する研究

名所図会や百景を分析対象としてそこにみられる景観・デザインを把握する研究として，橋本ら<sup>5)</sup>，須藤ら<sup>6)</sup>による研究がある．

表-1 収集した名所図会・百景

刊行年						媒体		絵図の枚数		まえがき・あとがきから読み取れる文献の性格		
年号	年	文献番号	文献名	作者・編者など	発行者	絵画 or 写真	モノクロ or カラー	全体 : A (枚)	分析 対象 : B (枚)	B/A (%)	選定の基準・方法	絵図の性質・流布の状況
明治	9-14	1	東京名所図	小林清親画	—	絵画	カラー	95	15	15.8	—	—
	11	2	東京百景・名所手続	由利義次郎編	龍谷庄七	絵画	モノクロ	19	0	0.0	—	—
	13-22	3	東京真面目名所図解	井上安治画	—	絵画	カラー	133	25	18.8	—	—
	16	4	東京名所案内・画入	安井乙熊編	文盛堂	絵画	モノクロ	61	5	8.2	※判読困難	—
	17	5	東京名勝図会	岡部啓五郎著	丸家善七	絵画	モノクロ	38	3	7.9	旧誌と新書から選定	—
	23	6	東京名所指南・雅俗類編	菅復三編・大槻文彦問	小杉賢治	絵画	モノクロ	20	2	10.0	観光案内が目的	—
	23	7	東京名所図経（東雲堂）	—	東雲堂	絵画	モノクロ	50	5	10.0	—	—
	23	8	東京名所図経（双々館）	原田真一編	双々館	絵画	モノクロ	98	7	7.1	※判読困難	—
	24	9	東京名所鑑	新井藤次郎著	井上陽五郎	絵画	モノクロ	16	0	0.0	—	—
	25	10	東京名所鑑	相沢流著	—	絵画	モノクロ	87	10	11.5	名所旧跡の網羅性	—
	29	11	東京名所案内	浅羽康也編	桜書武金	写真	モノクロ	90	9	10.0	観光案内が目的	—
	29	12	東京名所鑑案内	和田庄蔵編	和田文宝堂	絵画	モノクロ	32	3	9.4	※判読困難	—
	35	13	東京名所写真帖	亀井和七編	美博堂	写真	モノクロ	12	0	0.0	—	—
	35	14	東京名所写真帖	山田繁蔵編	山田繁蔵	写真	モノクロ	12	0	0.0	—	—
	35	15	東京名所	機斎著	田井久之助	絵画	カラー	27	2	7.4	—	—
	41	16	東京名所写真帖	—	いろは書房	写真	モノクロ	80	3	3.8	—	—
	42	17	最新東京名所写真帖	—	小島文市	写真	モノクロ	70	5	7.1	—	—
	44	18	東京風景	—	小川写真製版所	写真	モノクロ	124	6	4.8	名所旧跡の網羅性	—
	44	19	東京名所写真帖	—	高堂堂	写真	モノクロ	45	7	15.6	—	—
	大正	45	20	東京府名勝図解	田山泉亭編	ともゑ商会	写真	モノクロ	155	5	3.2	—
5		21	新選東京名所	—	大橋堂	写真	モノクロ	30	2	6.7	—	—
9		22	東京名所画帖	—	天正堂画局	写真	モノクロ	30	2	6.7	—	—
7		23	新東京百景	恩地孝四郎他版画	創作版画倶楽部	絵画	カラー	100	12	12.0	—	日本橋丸善第一回、二回車上社展において一部を出品
7		24	大東京百景版画家集	中島重太郎編	日本風景版画家会	絵画	モノクロ	100	7	7.0	—	23人の版画家の作品集
10		25	大東京名所百景写真帖	—	青海堂	写真	モノクロ	95	3	3.2	—	—
17		26	大東京百景写真帖	永瀬米次郎著	—	写真	モノクロ	105	2	1.9	—	—
42		27	東京百景	日野純之祐著	三彩社	絵画	モノクロ	100	7	7.0	—	—
50		28	新東京百景	高田英三著	スポーツニッポン新聞出版局	絵画	モノクロ	100	5	5.0	東京の現実かつ案内図	「スポーツニッポン新聞」に連載（昭和49年8月～同50年3月）
53		29	下駄の向くまま 新東京百景	滝田ゆう著	講談社	絵画	モノクロ	45	3	6.7	気の向くまま	「日刊ゲンダイ」に連載（昭和51年12月～同52年10月）
昭和戦後	60	30	新東京風景 ちょっと意外な名所あるき	井出孫六文・石井昌造画	東京タイムズ社	絵画	モノクロ	51	0	0.0	東京のなまなましい現実	「東京タイムズ」に連載（昭和59年5月～同60年5月）
	60	31	東京の情景	池波正太郎著	朝日新聞社	絵画	カラー	30	7	23.3	むかしの東京の残片	「アサヒグラフ」に連載（昭和58年6月～同年12月）
	61	32	別冊一枚の絵Vol19 画集東京百景	—	一枚の絵株式会社	絵画	カラー	30	3	10.0	—	受賞歴を持つ36人の画家の作品集
	63	33	新東京百景	東京都生活文化局編	東京都生活文化局	絵画	カラー	100	2	2.0	都民の投票による選定	—
平成	8	34	東京百景	島西忠雄画	ART BOXインターナショナル	絵画	カラー	100	7	7.0	古書を参考にスタート	—
合計								2280	174	7.6	—	—

## c) 近代以降の名所風景の変容に関する研究

また名所の変遷から風景の変容を読み取る研究としては、樋口ら<sup>7)</sup>、大宮ら<sup>8)</sup>、馬木<sup>9)</sup>、羽生<sup>10)</sup>の研究がある。

本研究は c) の研究に類するが、既存研究がいずれも名所全体の変遷に対して考察を扱っているのに対して、本研究では東京都心部の中小河川に対象を限定し、その景観の特質と変化を分析する点に特徴がある。

## 2. 研究の対象と方法

### (1) 中小河川について

明治期以降に発刊された東京の名所図会・百景に採録されている、都市中小河川を構図の内に含む絵図・写真を収集した。なお本研究では「東京都心部の中小河川」の定義を「東京に存在したまたはしている水辺のうち、隅田川・江戸川・多摩川を除く中小の河川と、上水、掘割、江戸城外堀」とする。

中小河川を対象とする理由は、隅田川などの大河川に対して護岸や沿川建物などの構造物の変化によって明治期以降の景観の変化が大きいこと、および水辺のデザインとしてみた場合の制約条件が大きく、その景観を考えるには対象空間の操作だけでなく景観体験の主体である人々の見方や価値観を探ることがより重要となるためである。

### (2) 名所図会・百景について

#### a) 資料の選定条件

名所図会・百景を研究対象とした理由は、その時代の人々の景観への好みが現れたものとして既存研究におい

ても分析対象として扱われており、明治期以降に刊行された名所図会・百景は写実性も高く、対象景観の特質を考察することができる視覚的資料として適当と考えたためである。

本研究では「東京」「名所」「名勝」「百景」のキーワードに該当する文献資料の中から、以下の3つの条件をすべて満たす冊子を研究対象として選定した。

- ①発行当時の東京の風景を対象とした名所の絵画集または写真集。
- ②解説文のある場合、解説が主になるのではなく、解説ごとに絵図・写真のあるもの。
- ③明治以降に刊行されたもの。

なお、名所の本としては著名な山本松谷の『新選名所図会』は、対象地の多さと編集期間がかなり長期間に渡ることによって研究対象から除外した。以上の条件で収集したものから、内容が同一のもの、または絵画・写真の黒ずみがひどく判読が困難なものを除いた計 34 冊を研究対象にした（表-1）。

#### b) 資料媒体の問題と対応

名所の重要な特徴のひとつはその内容が一般的にある程度認知されている点だが、近代特に戦後の名所本は、編纂数の減少、選定根拠の恣意性の増大などから、時代の代表性に疑問が残る。

「まえがき」などから文献の特性を把握することは一部の文献のみでは可能だが、網羅はできなかった。新聞記事や行政による景観施策としての百景などを補完資料として用いることも考えられるが、資料媒体としての不統一という問題が大であると考え、本研究では単行本として刊行された絵画集・写真集に限定して調査することにした。尚、分析対象の絵図は複数の文献に採録された場所とすることで、特異な事例は排除した。

### c) 分析対象の絵図

それぞれの冊子から、東京都心部の中小河川を対象とした絵画および写真（以降これらを合わせて絵図と呼ぶ）を抽出した。その結果 252 枚の絵図が該当したが、この中から 1 冊だけでなく 2 冊以上に収録された場所を描いた 174 サンプルを最終的な分析対象とした（表-1）。なお河川の河道内部や水面が含まれていなくても、明らかに対象河川に隣接する場所であるものは含めている。また隅田川に流入する河川の河口部では画面上に隅田川を含むものも対象とした。

### (3) 研究の方法

中小河川の名所の特性と変遷を把握するために、本研究では、名所として選ばれている場所および景観の構成要素と、その描き方との二側面から分析を進める。双方の側面から、時代的な変化を追うとともに、場所による特徴があるか否かを明らかとする。具体的には3章で、対象とする174枚の絵図について、その場所と絵図に含まれている景観の構成要素の時代的変遷を分析する。次に描き方の分析については、全サンプルを対象とした構図の特徴を大まかに視点のとり方や描かれている領域の広がりなどによって整理してみたが、時代的な特質を統計的に把握することができなかった。それは描かれる場所や対象が時代的に変化していることも影響しているためと考えられる。そこで、明治期から現代までほぼ継続して採り上げられている場所を対象にして、そこを描いた絵図の詳細な分析をすることによって描き方の特質および変化を把握することとした（4章）。

次いで、名所の変遷は、名所とされた環境の変化と、それを名所とみなす人々の価値観の変化との2つの要因

によって起きていると考えられるため、それに対する分析を5章で行い、前章までの成果を含め現代の中小河川景観に対する示唆を述べる。

次に分析における時代区分について述べる。大宮ら<sup>8)</sup>の研究によると、近代以降の名所図会・百景全体の描写対象とその描かれ方は、①明治元年から明治20年代②明治30年代から大正期③昭和戦前期④昭和戦後期に分かれるとしている。しかし、中小河川に対象を限定した本研究では、日本橋や御茶ノ水のような代表的な場所において絵図の内容が明治期内ではあまり変化していない。また実際の東京都心部の空間の変化として市区改正設計新設計の事業、帝都復興事業、戦災復興事業、高度成長期があるが、絵図には大正期と昭和戦前期で顕著な変化が見られなかったこと、また時代ごとのサンプル数の偏りを避けるため、本研究では大きく3区分とすることとした。すなわち①明治期（明治初期から明治30年代まで。サンプル数86）、②戦前期（明治40年代から昭和20年代まで。サンプル数54）、③戦後期（昭和20年代以降現代まで。サンプル数34）である。

## 3. 名所の場所と興味対象の変遷

### (1) 名所の位置の変遷

分析対象の絵図の場所の位置と採録された枚数を時代区分ごとに図-1に示す。図中の括弧内の数字がその時代に採録された絵図の枚数である。以下、東京都心部中小河川の名所の位置の変遷について記述する。

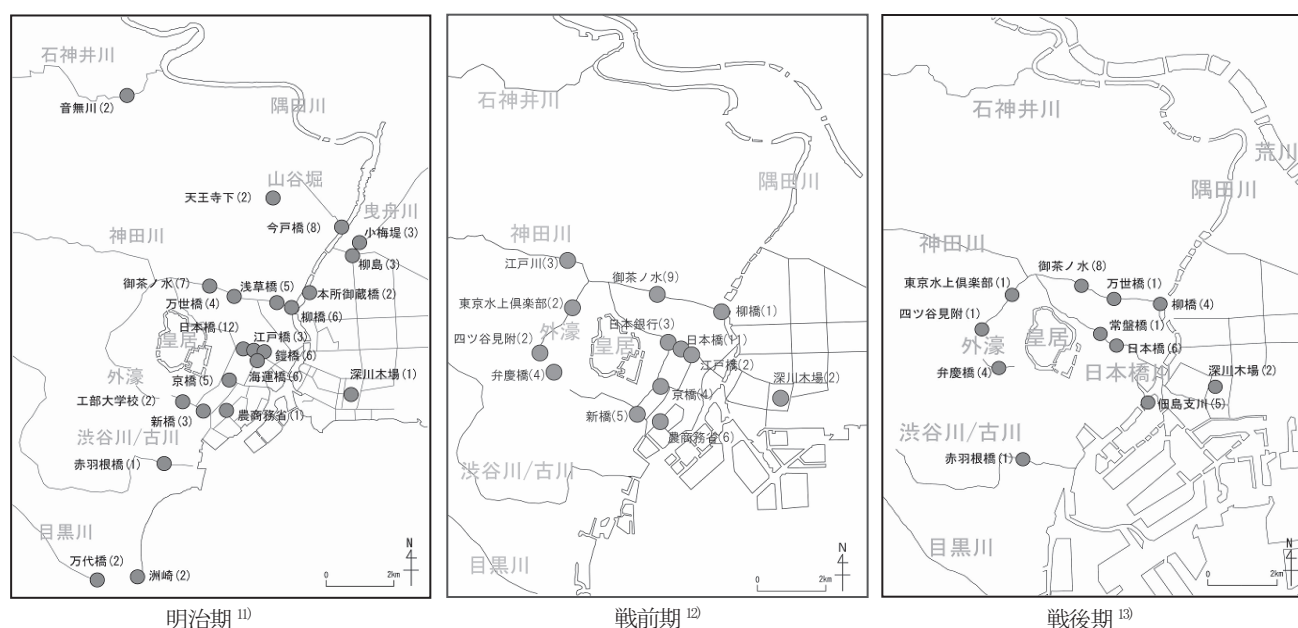


図-1 都心部中小河川の名所の位置の変遷



## a) 明治期

主に皇居より東側のエリアに分散して位置しており、小河川の河口あるいは隅田川合流地点に比較的近い場所が採録されている。その中でも特に日本橋川周辺が多い。

## b) 戦前期

江戸川と深川木場を除いた全ての名所が、神田川と隅田川と外堀に囲まれたエリアに位置する。また、皇居より西側の外堀に位置する場所が新規に採録された。新橋から日本橋周辺のエリアに名所が増加する一方、隅田川以東のエリアにはほとんど見られなくなった。また、隅田川沿いには柳橋と今戸橋を残して採録されなくなった。

## c) 戦後期

明治期に多く採録されていた、新橋から日本橋周辺のエリアの名所群が、日本橋を除いて全て採録されなくなった。また佃島の入堀が新規に採録された。3つの時代区分を通して観ると、採録される場所の数は時代を経るごとに減少しているとともに、分布するエリアも縮小している。その中であって神田川と日本橋川は、御茶ノ水と柳橋、日本橋を中心にとどの時期の名所図会・百景にも採り上げられており、東京都心部の中小河川の伝統ある名所だと言えるだろう。

## (2) 興味対象の変遷

### a) 分析の方法

興味対象の時代による変遷をみるために、ひととおり分析対象の絵図を調査したところ、全ての時代を通じて絵図に描かれている主要要素は、橋・歩行者・舟・建物・水面・樹木の6つに分類できた。これらは中小河川景観における人々の興味対象と考えられる。時代ごとにこれらの要素を含むサンプルの割合を算出した。以下要素ごとに特徴を述べる。なお、図中に付した数値は絵図の実数である。

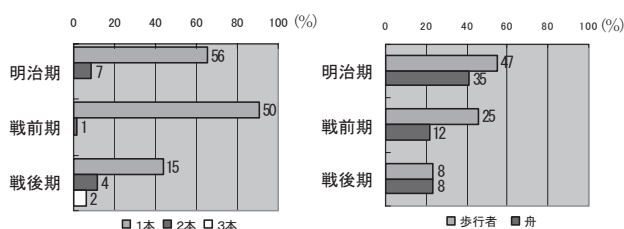


図-2 橋を描いた  
絵図の割合の変化

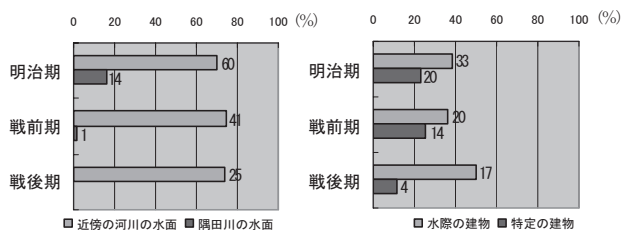


図-3 歩行者と舟を描いた  
絵図の割合の変化

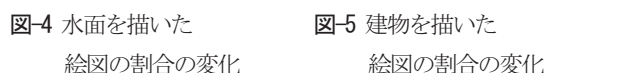


図-4 水面を描いた  
絵図の割合の変化

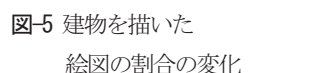


図-5 建物を描いた  
絵図の割合の変化

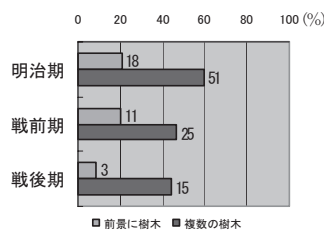


図-6 樹木を描いた  
絵図の割合の変化

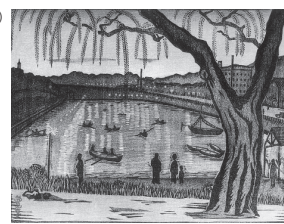


図-7 前景に樹木のある例  
(東京水上倶楽部、表-1の文献番号23)

### b) 橋 (図-2)

橋は水面と並んでもっとも多く描かれている興味対象である。その割合は戦前期に最も多く、9割以上となる。しかしそのほとんどで橋は1本のみ描かれており、戦後期には2本以上の橋を含むものが多くなっている。

### c) 歩行者 (図-3)

歩行者を含む絵図の割合は時代とともに減少している。特に戦後期では少なく、明治期の半数以下である。なお自動車は戦前期と戦後期に見られるがその割合は少なく、主要な興味対象とはなっていないと思われる。

### d) 舟 (図-3)

舟については、明治期に約4割の絵図に描かれているが、戦前期に半減し、わずかではあるが戦後期にやや増加している。中小河川に存在した舟の数は戦前期の方が戦後期よりも多いと考えられるが、描かれている割合は戦後期の方が多いため、舟が水辺景観において重要な興味対象として注目される程度が高まっているのではないかと推測される。

### e) 水面 (図-4)

河川を河川たらしめる最重要な要素ともいえる水面は、時代を通じて常に7割以上の絵図に描かれている。またわずかではあるが明治期よりも戦前期と戦後期の割合が高くなっている。なお水面として隅田川の水面も含むような絵図が明治期には1割近くあったのに対して、戦前期ではほとんどなくなり、戦後期にはまったく見られなくなっている。これは図-1にみられた名所の位置の変遷の結果が現れているといえる。

### f) 建物 (図-5)

都市の中小河川の景観では沿川の建物が重要な要素となると考えられるが、建物が描かれる割合は明治期および戦前期に4割弱で戦後期には約5割となっている。またニコライ堂や日本銀行などは当時特定の建物として識別されていると思われ、解説や表題にその名称が記されているものあるいは著者が当時の絵葉書や写真集などを調査して名称を特定できた建物を調査したところ、それらが描かれているのは戦前期に最も多く見られる。戦前期には橋の描かれる割合も最も高く、これら近代建築や近代橋梁が初めて多く出現し新しい水辺景観として人々の興味を惹いたのではないかと推測される。

### g) 樹木 (図-6)

樹木は前景に樹木がある絵図の割合と、複数の本数の樹木が描かれている絵図の割合について調べた。それぞれの結果は一部重複している。前景に樹木が描かれている絵図 (図-7) は戦前まで2割程度だが、戦後減少している。複数の本数の樹木を描いている絵図は明治期から減少しているが、4割以上に描かれている。

### (3) 名所の場所と興味対象の変遷

以上より、名所とされた東京都心部の中小河川は、時代とともにその数および分布エリアが減少していることが確認された。全般的に皇居より北部と東部での減少が顕著であり、神田川と日本橋川に名所の多くが限定されていく。また興味対象については、最も重要と思われる要素は水面と橋であり、ついで複数の樹木のかたまりが挙げられる。描かれた興味対象の変化は、名所の位置の変化ほどには大きな傾向は見られないが、明治期には舟と歩行者の割合が他の時代よりも高く、名所空間における人々のアクティビティに注目が集まる傾向が見られる。また戦前期はこの時代に多く登場した近代建築や橋梁に注目する傾向が見られ、戦後期には複数の橋梁の組み合わせや川沿いの建物に興味を示される傾向があると考えられる。

## 4. 継続的に採録されている場所の描き方の特徴と変化

### (1) 4章の対象地と方法

#### a) 対象地

4章では名所の描き方の時代的变化を明らかにするために、3期すべてにわたって描かれた場所を対象として、その絵図の特性を分析する。対象地は場所の特性および描かれた絵図の枚数とバリエーションも考慮して次の4箇所とした<sup>14)</sup>。神田川の御茶ノ水 (絵図24枚)、柳橋 (同11枚)、外濠の弁慶橋 (同8枚)、日本橋川の日本橋 (同29枚) である。

#### b) 分析方法

分析対象の絵図から、描かれている主な視対象を抽出するとともに、視点の位置と視野としている領域を地図に落とし、視距離・水平画角を測定した。その結果から、それぞれの場所の同じ時期に共通している主要な視対象ごとに、絵図をグループに分ける。さらに4.(6)において、それらのグループを視点と視対象の関係の観点から描かれ方のタイプに分け、変遷を把握する。

以下、4.(2)から4.(4)まで、場所ごとにほぼ各時代区分においてみられるグループの説明をする。なお、各グ

ループに付された場所名のアルファベットと数字を組み合わせた記号は、図-21中の記号と対応している。分析図図-9から図-20における凡例と具体的な測定方法を図-8に示す。また、紙面の都合から各図の縮尺は1/7500とした。

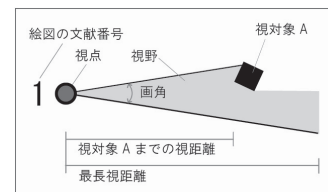


図-8 分析図の凡例と測定方法

### (2) 御茶ノ水

御茶ノ水は明治9-14年刊行『東京名所図』から平成8年刊行『東京百景』まで計18冊24枚に描かれている。

表-2 御茶ノ水を描いた絵図の特性

名所図会・百景			興味対象							描かれ方								画角 (°)								
刊行			水面		橋		建物		歩行者・舟		樹木		視距離(m)													
年号	年	文献 番号 <sup>※</sup>	神田川	懸樋 懸樋	御茶ノ水橋	聖橋	丸の内線の橋梁	ニコライ堂	御茶ノ水駅	湯島天神	神田川沿いの建屋	舟	歩行者	舟	前庭の樹木	複数の樹木	懸樋	御茶ノ水橋	御茶ノ水駅	ニコライ堂	聖橋	総武線鉄橋	丸の内線	最長		
明治	9-14	1	○									○				○	94	-	-	-	-	-	-	188	45	
		2	○	○								○	○			○	94	-	-	-	-	-	-	188	45	
		3										○	○													
	13-22	3	○	○												○	94	-	-	-	-	-	-	188	45	
	16	4	○	○							○					○	101	-	-	-	-	-	-	236	44	
	25	10	○		○											○	-	53	-	-	-	-	-	206	69	
	29	12	○	○												○	-	86	-	-	-	-	-	484	32	
	41	16	○	○												○	101	-	-	-	-	-	-	236	44	
	42	17		○							○		○				-	41	-	-	-	-	-	-	131	33
	44	18	○	○				○	○	○	○					○	-	146	116	356	-	-	-	-	398	21
昭和	7	23	1	○		○					○					○	-	-	-	-	113	-	-	-	184	22
		2	○	○								○														
		24	1	○	○	○			○	○	○	○					○	-	-	-	173	4	-	-	188	31
	42	27	2	○	○			○	○	○	○					○	-	146	116	356	-	-	-	398	21	
	1	○						○	○	○	○					○	-	-	71	244	-	-	-	248	22	
	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	-	-	-	-	248	23	161	304	37	
	53	29	○		○	○	○	○	○	○	○					○	-	-	71	-	90	-	-	184	473	27
	60	31	1	○	○											○	-	-	-	-	-	-	188	34	285	43
	1	2	○													○	-	-	-	-	-	-	-	49	146	18
	61	32			○			○							○	-	-	-	173	0	-	-	-	-	184	2
平成	63	33	○	○	○	○	○	○	○	○					○	-	356	-	-	203	-	-	-	143	705	45
	8	34	○												○	-	-	45	-	120	-	-	-	214	604	65

※縦2列に分かれている箇所では、左が文献番号、右が分析図上で同じ文献の絵図と識別するための絵図の番号を指している。以下、図-3,4,5も同様。

#### a) 明治期

##### ①類似の視点から流軸方向に懸樋を描く (0-1)

「御茶ノ水」という地名は現在の水道橋から現在の御茶ノ水付近を指しており、描いている場所は現在の水道橋に近い。水道橋南側の橋詰から、約100m先の神田上水の懸樋を描いている。(図-9のno.1-1,1-2,3,4,16)

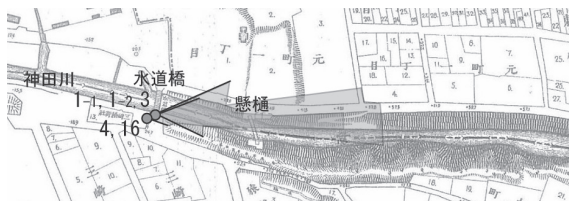


図-9 明治期御茶ノ水の絵図の視点と視野 その1<sup>15)</sup>

##### ②複数の視点から御茶ノ水橋を描く (0-2)

視点の位置も向いている方向も異なるが、どれも御茶ノ水橋を100mもない距離から描いている。(図-10のno.10,12,17,19)





図-10 明治期御茶ノ水の絵図の視点と視野 その2<sup>16)</sup>

b) 戦前期 類似の視点から御茶ノ水橋とニコライ堂を描く (0-3)

順天堂病院の前から、神田川の水面を視野に入れ、約150m先の御茶ノ水橋、さらに約350m先のニコライ堂まで遠望する。(図-11のno. 18, 20, 24-2)

c) 戦前期から戦後期 複数の視点から聖橋を描く (0-4)

視点や視距離は異なるが、聖橋を主題として描いている。(図-11のno. 23-1, 24-1と図-12のno. 32)

d) 戦後期

① 複数の視点から流軸方向に丸の内線と総武線の橋を描く (0-5)

地下鉄丸の内線の橋とJR総武線の橋を、流軸方向に別の視点から描いている。描かれた最も近い橋は視点から30m前後で、最長の視距離が250mから300m前後、水平画角も40度前後である点も共通している。(図-12のno. 27-2, 31-1)

② 類似の視点からJR御茶ノ水駅と聖橋を描く (0-6)

御茶ノ水橋の北側の橋詰付近から、JR御茶ノ水駅と聖橋を描いている。(図-12のno. 29, 34)

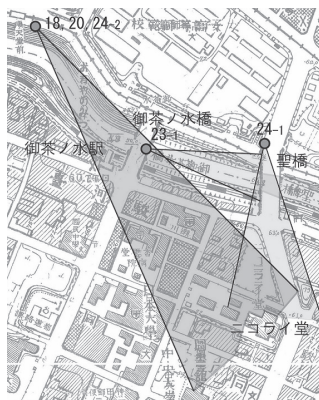


図-11 戦前期御茶ノ水の絵図の視点と視野<sup>17)</sup>

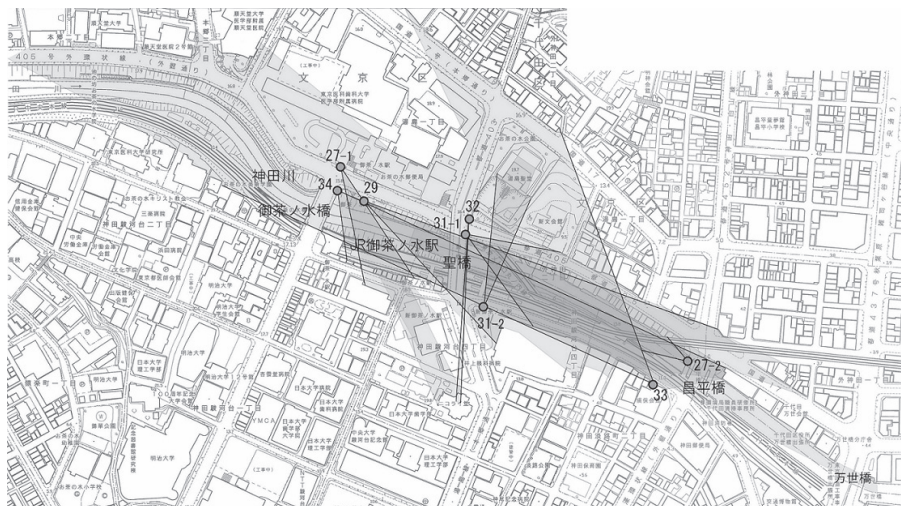


図-12 戦後期御茶ノ水の絵図の視点と視野<sup>18)</sup>

(3) 弁慶橋

弁慶橋は明治44年刊行『東京風景』から平成8年刊行『東京百景』まで計7冊、計8枚に描かれている。

表-3 弁慶橋を描いた絵図の特性

名所図会・百景		興味対象						描かれ方					
刊行年		水面	橋	建物	樹木	その他		視距離(m)		画角(°)			
年号	年	文献番号	外濠	弁慶橋	ホテルニューオータニ	複数の樹木	高速道路	対岸	ポイント乗り場		弁慶橋	ホテルニューオータニ	最長
明治	44	18	○	○		○	○		○	90	—	353	40
	44	19	○	○		○	○		○	86	—	394	30
	7	23	○	○		○	○		○	94	—	293	30
昭和	17	26	○	○		○	○		○	38	—	233	40
	50	28	○	○		○	○		○	146	244	533	46
	53	29	○	○		○	○		○	—	116	323	80
平成	8	34	1	○		○	○		○	—	248	563	65
		34	2	○		○	○		○	—	—	191	38

a) 戦前期

① 類似の視点から弁慶橋を描く (B-1)

外濠の南岸、弁慶橋より東側から、水際の樹木を前景に、水面、弁慶橋、そして対岸の様子を描いている。

(図-13のno. 18, 19)

② 類似の視点から弁慶橋を描く (B-2)

①と構成要素が似ているが、弁慶橋より西側の水際から、弁慶橋と対岸の様子を描いている。(図-13のno. 23, 26)

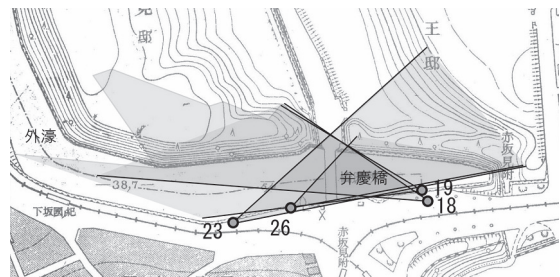


図-13 戦前期弁慶橋の絵図の視点と視野<sup>17)</sup>

b) 戦後期 複数の視点からホテルニューオータニと高速道路を描く (B-3)

異なる視点から、水面、ホテルニューオータニと高速道路を描いている。最長300m以上の距離を描いている。

(図-14のno. 28, 29, 34-1)



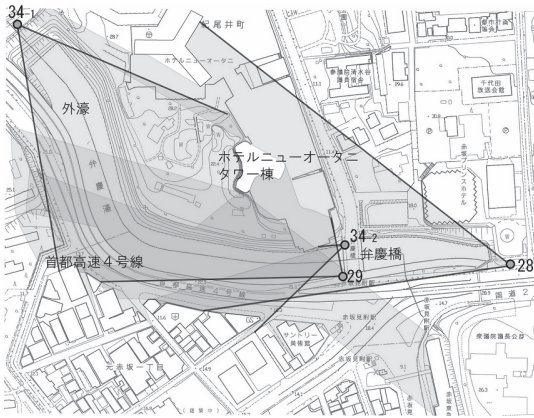


図-14 戦後期弁慶橋の絵図の視点と視野<sup>18)</sup>

#### (4) 柳橋

柳橋は明治 13-22 年刊行『東京名所図』から平成 8 年刊行『東京百景』までに計 10 冊 11 枚に描かれている。

表-4 柳橋を描いた絵図の特性

名所図会・百景			興味対象										描かれ方			
刊行年			水面	橋	建物	歩行者・舟	その他	視距離(m)								面角(°)
年号	年	文献番号	神田川	柳橋	神田川沿いの建物	歩行者	舟	柳橋	隅田川対岸	船宿	柳橋	隅田川対岸	船宿	最長		
明治	13-22	3-1	○	○	○	○	○	8	225	-	240	60				
	23	7	○	○	○	○	○	4	203	-	240	43				
	23	8	○	○	○	○	○	0	191	-	360	36				
	23	10	○	○	○	○	○	19	-	-	64	41				
	29	11	○	○	○	○	○	23	214	-	240	80				
昭和	7	23	○	○	○	○	○	0	251	-	293	37				
	42	27	○	○	○	○	○	-	-	49	83	47				
	50	28	○	○	○	○	○	30	-	30	210	50				
	60	31	○	○	○	○	○	30	-	0	143	59				
平成	8	34	○	○	○	○	○	-	-	23	454	71				

a) 明治期から戦前期 類似の視点から柳橋と隅田川を描く (Y-1)

柳橋の両側の橋詰付近から、柳橋と隅田川、そしてその対岸を描いている。(図-15 の no. 3-1, 3-2, 8, 7, 10 と図-16 の no. 23)

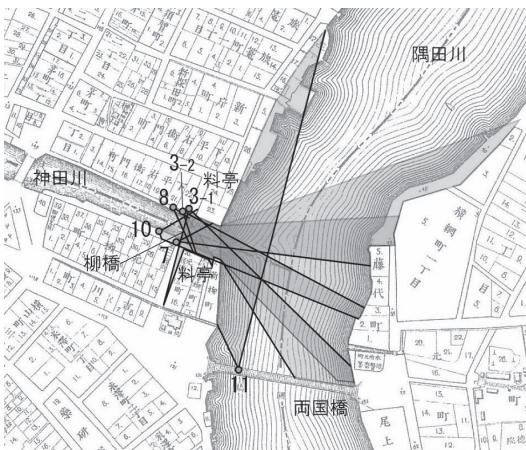


図-15 明治期柳橋の絵図の視点と視野<sup>15)</sup>

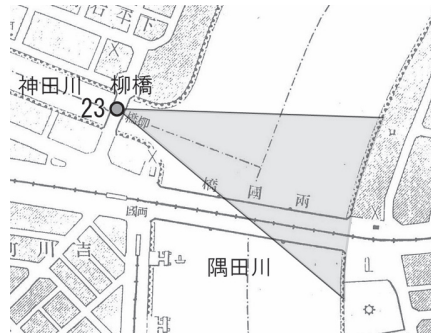


図-16 戦前期柳橋の絵図の視点と視野<sup>17)</sup>

b) 戦後期 複数の視点から船宿を描く (Y-2)

水際から 50m はない距離にある船宿を描いている。(図-17 の no. 27, 28, 31)

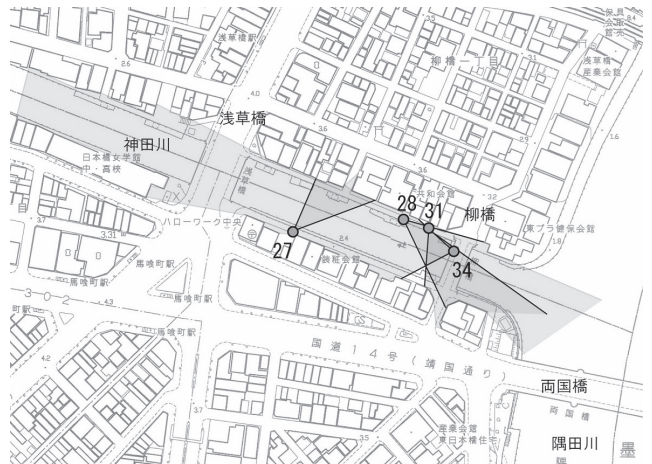


図-17 戦後期柳橋の絵図の視点と視野<sup>18)</sup>

#### (5) 日本橋

日本橋は明治 9-14 年発刊『東京名所図』から平成 8 年刊行『東京百景』まで計 27 冊、計 29 枚に描かれている。

表-5 日本橋を描いた絵図の特性

名所図会・百景			興味対象													描かれ方							
刊行			水面	橋	歩行者・舟			その他							視距離(番)				面角(°)				
年号	年	文献番号	日本橋川	江戸橋	歩行者	舟	前景の樹木	馬車	人力車	荷車曳き	物売り	馬車鉄道	路面電車	河岸	日本橋通り沿いの街並み	自動車	高速道路	日本橋		河岸	江戸橋	最長	
明治	9-14	1	○	○	○			○	○							○			26	-	-	191	39
	13-22	3	1	○	○	○	○								○				236	83	-	439	20
			2	○	○	○									○				248	165	-	390	14
	16	4	○	○		○												116	-	-	169	15	
	17	5		○	○				○	○		○			○			30	-	-	199	36	
	23	6	○	○	○	○					○	○	○					38	-	-	139	23	
	23	7	○	○	○							○	○	○				23	68	-	199	33	
	23	8	○	○											○	○		41	105	-	135	26	
	25	10	○	○	○	○	○		○						○	○		113	169	364	476	20	
	29	11	○	○										○				221	75	-	484	32	
	29	12	○	○	○	○							○	○				19	68	-	233	104	
	35	15	○	○		○												221	83	-	345	22	
	42	17	○	○		○									○			229	75	-	416	16	
	44	18	○	○	○	○	○							○	○			34	105	-	435	66	
	44	19	○	○	○	○								○		○		19	-	-	259	51	
	45	20	○	○	○													15	-	-	120	39	
	大正	5	21	○	○	○	○								○	○			34	105	-	435	66
		9	22	○	○	○	○	○								○	○		34	-	-	311	56
	昭和	7	23	1	○	○	○												98	-	-	495	34
7		24	○	○	○										○			53	-	-	158	46	
10		25	○	○	○								○	○				15	-	-	173	47	
17		26	○	○	○											○		19	-	-	375	40	
42		27	○	○	○												○	0	-	-	128	18	
50		28	○	○	○												○	68	-	-	120	9	
60		31	○	○	○												○	0	-	-	150	39	
60		32	○	○	○												○	0	-	-	274	25	
平成	61	31																○	8	-	-	116	46
	63	33	○	○														○	36	-	-	158	36
	8	34	○	○	○	○	○									○	○	○	15	-	-	248	40

## a) 明治期

### ①類似の視点から流軸方向に日本橋と河岸を描く (N-1)

日本橋川沿いや江戸橋など隣接する橋付近から、流軸方向に河岸の様子と日本橋を描いている。(図-18 の no. 3-1, 3-2, 4, 10, 11, 15, 17)

### ②類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く (N-2)

日本橋の橋詰から、橋の上の様子と通りの街並みを同時に描いている。人力車など、日本橋を通行する要素を描いているものが多い。(図-18 の no. 1, 5, 6, 7, 8)

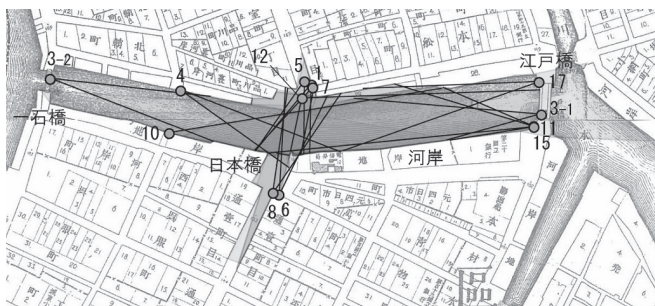


図-18 明治期日本橋の絵図の視点と視野<sup>15)</sup>

## b) 戦前期

### ①類似の視点から流軸方向に日本橋と河岸を描く (N-3)

a) 明治期の①と比べ、視点が日本橋に近い場所が選ばれており、また東側から日本橋を描くものが減少した。(図-19 の no. 18, 21, 23-1, 23-2)

### ②類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く (N-4)

a) ②と似ているが、視点の位置が日本橋南側に増加した。(図-19 の no. 19, 20, 22, 24, 25)

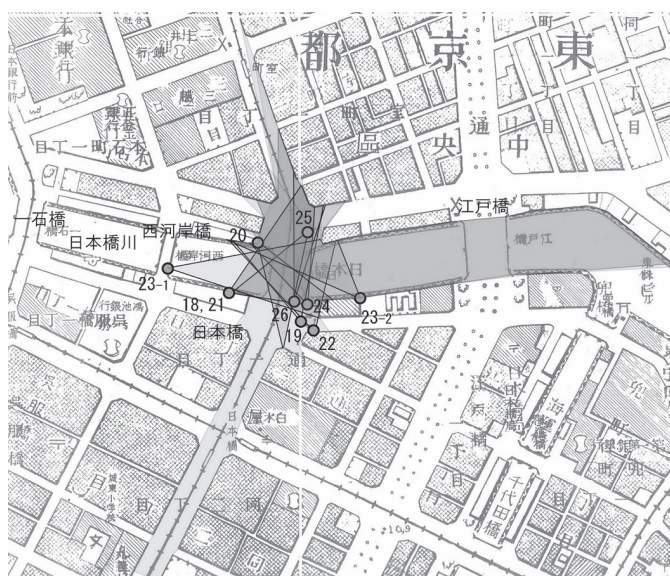


図-19 戦前期日本橋の絵図の視点と視野<sup>17)</sup>

## c) 戦後期

### ①類似の視点から流軸方向を描く (N-5)

日本橋の橋上から流軸方向に描いている。照明灯など日本橋の橋上の要素と高速道路が主な視対象である。

(図-20 の no. 28, 31)

### ②類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く (N-6)

日本橋の橋詰付近から日本橋、高速道路、そして対岸の通りの様子を描いている。(図-20 の no. 32, 33, 34)

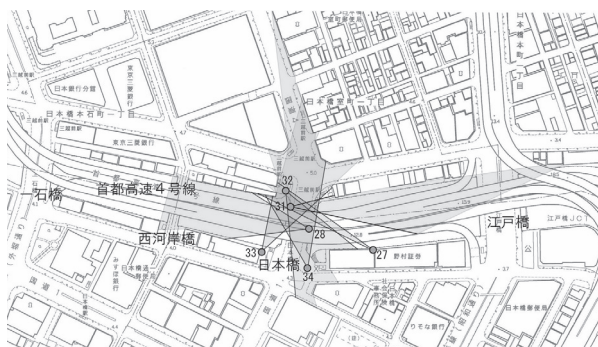


図-20 戦後期日本橋の絵図の視点と視野<sup>18)</sup>

## (6) 描き方の分析

以上のように場所ごとに調査した絵図のグループの出現時期と代表的な絵図を図-21 に示す。以下に、これまでの結果から、名所となる中小河川の描き方の特徴と変遷について考察する。

### a) 描き方のタイプ

まず全体としてどのような描き方があったかを、視点と視対象、視距離に注目し、場所ごとに見られた絵図のグループを集約して整理すると、図-22 に示した以下の7つのタイプにまとめられる。

タイプ	視線の方向	視点の位置	視点から主な視対象までの距離(m)													グループ
			0	50	100	150	200	250	300	350	400	450	500	550	600	
A	流軸	橋上・橋詰 または 水際	橋梁			最長視距離										0-1 B- 0-2 N- N-3
B	流軸	水際	1本目の橋梁		最長視距離										0-3 0- 0-6 B-	
			駅・ホテル・教会			2本目の橋梁										
C	流軸・対岸	橋付近	橋梁		最長視距離										0-2 0-4	
D	対岸	橋詰	橋梁		最長視距離										N-2 N- N-6	
			通り													
E	流軸	橋上	最長視距離													N-5
F	対岸	水際	船宿		最長視距離										Y-2	
G	流軸・対岸	橋詰	橋梁		隔田川対岸										Y-1	
			最長視距離													

図-22 描き方のタイプ

**Type A:** 橋上・橋詰・水際から流軸方向に視線をとり、近傍の橋梁を含む描き方。3箇所、各時代に見られ、構図の類似性もある。中小河川の代表的な描き方といえる。

**Type B:** 視点と視線方向はAと同様であるが、視野に複数の興味対象となる構造物を含み、それらの取り合わせに特徴がある描き方。地形条件により見通しが利きやすい御茶ノ水と弁慶橋に見られ、取り込まれる要素は、時代により変化し、新しい構造物も含まれる。









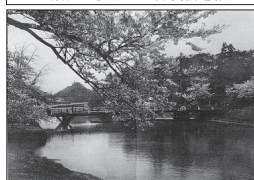



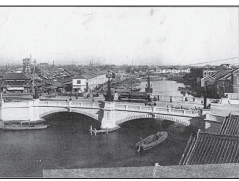
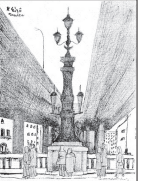



場所		明治										大正			昭和戦前			昭和戦後					平成
		9	13	16	17	23	25	29	35	41	42	44	45	5	9	7	10	17	42	50	53	60	61
御茶ノ水	代表的な絵図																						
	0-1 類似の視点から流軸方向に懸樋を描く										0-5 複数の視点から流軸方向に丸の内線と総武線の橋を描く			0-6 類似の視点からJR御茶ノ水駅と聖橋を描く									
	絵図の枚数	0-1 0-2 0-3 0-4										0-5 0-6											
弁慶橋	代表的な絵図																						
	0-2 複数の視点から御茶ノ水橋を描く										0-3 類似の視点から御茶ノ水橋とニコライ堂を描く			0-4 複数の視点から聖橋を描く									
	絵図の枚数	B-1 B-2 B-3																					
柳橋	代表的な絵図																						
	Y-1 類似の視点から柳橋と隅田川を描く										Y-2 複数の視点から船宿を描く												
	絵図の枚数	Y-1 Y-2																					
日本橋	代表的な絵図																						
	N-1 類似の視点から流軸方向に日本橋と河岸を描く										N-3 類似の視点から流軸方向に日本橋と河岸を描く			N-5 類似の視点から流軸方向を描く									
	絵図の枚数	N-1 N-2 N-3 N-4 N-5 N-6																					
日本橋	代表的な絵図																						
	N-2 類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く										N-4 類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く			N-6 類似の視点から通りの方向に日本橋と街並みを描く									
	絵図の枚数	N-2 N-4 N-6																					

図-21 描き方から分類した絵図のグループの場所ごとの変遷

描かれている絵図の枚数 1枚 2枚 3枚

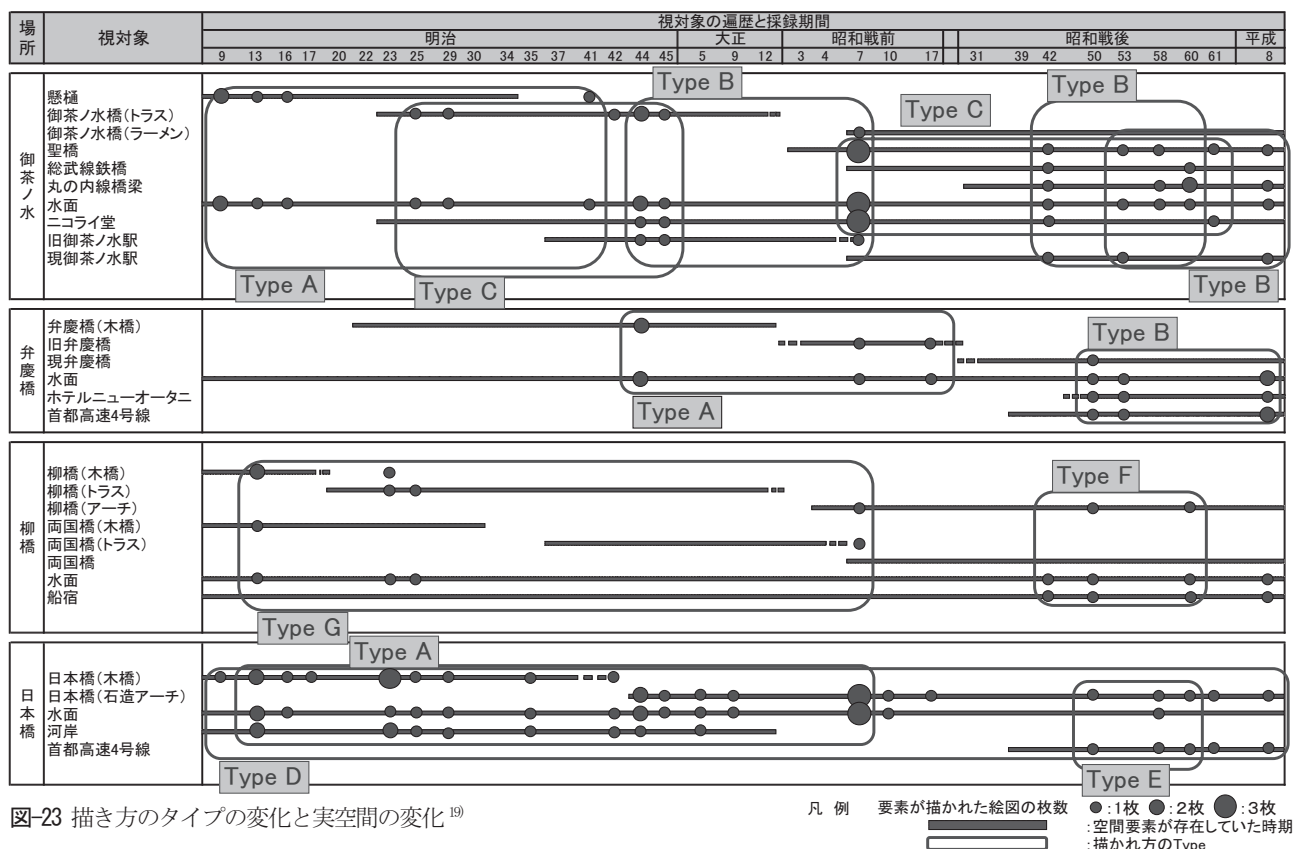


図-23 描き方のタイプの変化と実空間の変化<sup>19)</sup>

**Type C**：興味対象となる橋を描くことを意図し、視点を当該橋梁を眺めやすい近傍にとり、橋の特徴をよく表すような描き方。谷地形の御茶ノ水において御茶ノ水橋と聖橋に対してとられている。

**Type D**：橋上または橋の近傍で視線を橋軸方向にとり、橋の一部と周辺の街並を組み合わせた描き方。橋の近傍に建物が密集している日本橋で、いずれの時代にも見られ、首都高を含む新しい構造物を取り込み、橋との組み合わせを描いている。

**Type E**：D の特殊例とも解釈できるが、橋上に視点を、流軸方向に視線をとり、高欄など橋梁を特徴づける要素と周辺の構造物を組み合わせた描き方。日本橋と架設場所の特色のコントラストを強調している。

**Type F**：水辺に視点をとり、対岸方向に視線をとって、近傍の船宿や船を中心とした描き方。柳橋に見られる。

**Type G**：橋上および橋詰に視点をとり、当該橋梁がかかる川の流軸方向を遠方まで見通し、当該橋梁と遠望できる水面や街並を描く。隅田川合流点近くの柳橋に見られ、ヒューマンスケールな近景とのびやかな遠景の組み合わせを描いている。

以上のように、中小河川の名所では、視点を橋梁およびその近傍に多くとり、場所の特性に応じて、興味対象を単独もしくは組み合わせる描き方がされている。

## b) 場所の特性と描き方の変化

a) で述べたように描き方のタイプは場所との関係性が強い。改めて場所ごとに描き方のタイプの出現時期を図

23 に示した。ここから、タイプ C と D はいずれの時代にも見られる。タイプ D は日本橋において一貫してみられる描き方であるが、詳細にみると同じタイプでも時を下るごとに視距離が短くなっている。視距離が短くなる傾向はタイプ G から F に変化した柳橋にもみられる。これに対してタイプ A とそのバリエーションともいえる B がみられる御茶ノ水と弁慶橋では、より遠方の視対象を取り込んでいる。以上より、描き方の時代的な変化の 1 つの特徴として、見通しの利く場所では視距離を延ばして視野に入る遠方の興味対象を複数取り込んで描くのに対し、建物の密集化や高層化によって見通しが利かなくなった場所では視野を狭めて近傍の要素を集中的に描く、という場所による違いがみられた。

## 5. 名所景観の生成と変遷に関する考察

### (1) 名所の生成の構造

本研究の目的は、近代において中小河川の名所とされた景観の特質と変遷を明らかにすることである。そのために 3, 4 章では名所とされた絵図自体が、どこを（場所）、何を（興味対象）、どのように（構図：視点位置・画角・視距離など）描いているかを時代的に明らかとした。しかしそこで明らかになった内容は、物理的な環境の変化による当然の変化であるのか、あるいは人々の中小河川への嗜好の変化が反映されたものであるのか



は、判別できていない<sup>20)</sup>。そこで、名所として一定の評価を得る景観の生成の構造を仮説的に図-24 のようにとらえ、3,4 章で明らかになった結果の意味するところを考察する。

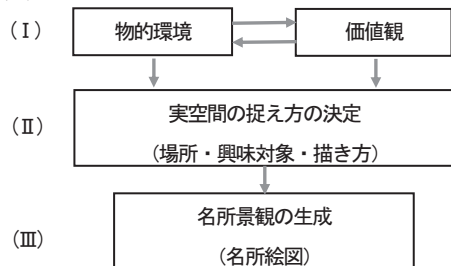


図-24 名所景観生成プロセスの仮説

まず、物理的環境と、眺めるという行為における人間の価値観の2側面が相互に影響を与えながら(I)、実空間の捉え方として選択されたもの(II)が名所景観として生成されて、絵図に描かれる(III)、と仮定する。本研究では(III)の絵図を分析し(II)の特性と変化を明らかにした。その要因である(I)を考察するために(I)の物的な環境の一部について調査可能である事項と(II)との対照を行い、名所の変遷の要因を類推する。具体的には物理環境の変化として、水面の消失と4章で分析対象とした場所における主な興味対象の存在期間を調査し、それと名所の内容の変化を対照させる。

## (2) 物理環境の変化と名所の変化の対照

### a) 水面の消失と採録の関係

表-6 水面の埋め立てと名所絵図の採録の関係

名所		水面消失の状況と絵図の枚数 <sup>※1</sup>				採録期間との一致
川	場所	明治	戦前	戦後	埋め立てられた時期 <sup>※1)</sup>	
楓川	海運橋	6	0	0	S35埋め立て免許	×
	柳橋	6	1	4	—	—
	浅草橋	5	0	0	—	—
	万世橋	4	0	1	—	—
	御茶ノ水	7	9	8	—	—
	江戸川	0	3	0	—	—
京橋川	京橋	5	4	0	S29埋め立て免許、S34工事完了	○
衣川	天王寺下	2	0	0	特定不可 <sup>※2)</sup>	比較不可
山谷堀	今戸橋	8	0	0	S33吉原遊郭廃止 その後埋め立て	×
汐留川	新橋	3	5	0	S29-38埋め立て工事完了	○
	工部大学校	2	0	0	—	×
石神井川	音無川	2	0	0	—	—
	井慶橋	0	4	4	—	—
外濠	四ツ谷見附	0	2	1	昭和戦前に埋め立て <sup>※3)</sup>	—
	東京水上倶楽部	0	2	1	—	—
築地川	農商務省	1	6	0	S35埋め立て免許	○
佃島支川	佃島支川	0	0	5	— <sup>※4)</sup>	—
	鐘橋	6	0	0	—	—
日本橋川	江戸橋	3	2	0	—	—
	日本橋	12	11	6	—	—
	常盤橋	0	3	1	—	—
	深川木場	1	2	2	S44新木場に移転 その後埋め立て	○
古川	赤羽根橋	1	0	1	—	—
目黒川	洲崎	2	0	0	—	—
	万代橋	2	0	0	—	—
曳舟川	小梅堤	3	0	0	戦後に暗渠化 <sup>※5)</sup>	×
横十間川・北十間川	柳島	3	0	0	—	—
本所の掘割	御蔵橋	2	0	0	戦後に水面消失 <sup>※6)</sup>	×

※1 水面が存在していた時期を差いつづけている。

※2 古地図から「衣川」という名の河川を特定することはできなかった。しかし絵図のタイトルに「天王寺下」とあることから、「衣川」とは、下谷にあった天王寺の近傍を流れていた音無川が谷田川である可能性が高い。音無川と谷田川はともに、関東大震災後に暗渠化された。

※3 S2刊行の地形図では、明治期と比べさほど埋め立ては進行していない。一方S5測量S22補修の地形図では、四ツ谷見附から市ヶ谷見附までの濠の約半分が埋め立てられている。

※4 S40個川埋め立てに伴い、佃川との合流地点は堀増まりになった。

※5 T11測量S22補修の地形図では水面が確認された。

※6 S5測量S22補修の地形図では水面が確認された。

水面の消失状況と名所絵図の採録の関係をまとめたのが表-6 である。特定できた27箇所のうち埋め立てられたのは10箇所だった。そのうち京橋・新橋・農商務

省・深川木場の4箇所が、埋め立てとともに名所として採録されなくなっており、水面の消失が名所変遷（消失）の主要因と考えられる。また海運橋・今戸橋・工部大学校・小梅堤・御蔵橋の5箇所は埋め立てよりも先に採録されなくなっている。一方、水面があっても採録されなくなったのは8箇所ある。従って計13箇所が水面の消失以外の要因で採録されなくなっているが、他の物理環境の変化あるいは価値観の変化によるものかは、判断できない。

### b) 継続して名所である場所の描き方の変化

4章で分析対象とした場所は環境が変化しながらも名所でありつづけている。図-23 に示した主な興味対象の存在時期と4章.(2)～(5)の調査結果から、A～Gの描き方の変化の要因が物理環境と価値観のいずれにあると考えられるかを考察し、表-7に整理した。

表-7 描き方の変化とその要因

描き方のType		描き方の変化	要因 <sup>※</sup>		備考
Type	場所		物理環境	価値観	
A	御茶ノ水・弁慶橋、日本橋	消失	×	—	懸樋の撤去、視点場の消失、スケール感の変化
B	御茶ノ水、弁慶橋	誕生	○	○	新規の橋・建物の出現、周囲の建物の高層化
C	御茶ノ水	継承	—	—	橋の存在と描かれている時期が一致
D	日本橋	継承	○	○	日本橋の架け替え、上空に高速道路の建設
E	日本橋	誕生	○	○	上空に高速道路の建設
F	柳橋	誕生（復活？）	—	○	江戸情緒を表す船宿が注目される
G	柳橋	消失	×	—	スケール感の変化

※凡例 ○:変化し続けられる要因となった ×:変化し描かれなくなる要因となった

—:変化がなく描かれ方の変化の要因とは考えられない

ここで、物理環境と価値観がともに変化して描き方の継承や誕生が見られるタイプBとDでは視対象が変化しても視点場としての橋詰や水辺は継続して確保されているのに対して、消失している描き方のAでは視点場自体の消失が起きている。同じくAとGでは周辺の構造物の大規模化により、場所のスケール感が変化している。

### c) 中小河川の名所の変遷の要因

a)b)の考察より、中小河川の名所の変遷は一般的なプロセスによるものではなく、以下のような複数のケースとして起きたと解釈される。

- ・ 水面の消失による必然的な名所の消失
- ・ 環境の変化にともなう名所の消失
- ・ 環境および価値観の変化による新たな描き方による名所の誕生
- ・ 環境および価値観が変化する中でも継承される描き方による名所の存続
- ・ 価値観の変化による新たな名所としての誕生もしくは復活

## (3) 現代の都市中小河川への示唆

最後に以上の本研究の調査分析結果および仮説に基づいた考察より得られる、現代の中小河川に対する示唆を述べる。

## 描き方のタイプに照らした新たな名所の発掘

4. (6)でまとめた7つの描き方は、場所の特徴に関連した名所となる中小河川の眺め方と考えることができる。よってこうした眺め方が可能な空間構造をもった場所を発掘し、新たな名所となりえる修景や意味づけを検討することは意義があると考えられる。

## スケール感への配慮

7つの描き方をそれぞれ特徴付けているものに興味対象への視距離、すなわちスケール感がある。中小河川は高密度な都市において貴重なオープンスペースであるが、その中でも特に見通しの利く場所では、そのダイナミックな眺めの確保が重要であるとともに、御茶ノ水のタイプBの描き方に見られるように近傍の橋梁や駅との組み合わせも大切であり、場所の特性を考慮した適切なスケール感の維持が名所の保全や継承において重要と考えられる。

## 名所の保全における視点場の重要性

5(2)bでも述べたように、物理的な環境の変化の中にあつて名所として存続し得るには、視点場の確保が重要である。日本橋において明治時代から継続的にみられた描き方であるTypeDについて具体的にみれば、様々な社会的環境の変化により明治と戦後では日本橋を描く意味が大きく変わっていると思われるが、橋詰から日本橋とその向こうに通りの様子を描く方法は変わっていない。常に生じる周辺環境や社会の変化を受け入れながらもそこに中小河川の名所として安定した価値を与えるためには、橋詰に代表される良好な視点場の保全が重要と考えられる。

## 参考文献及び注

- 1) たとえば、中村良夫・北村眞一、河川景観の研究および設計、土木学会論文集第399号 II-10, pp.13-26, 1988
- 2) 河川景観設計の代表例である太田川基町護岸(土木学会デザイン賞特別賞)の施工が1980年代前半である。
- 3) 鈴木理生、図説 江戸・東京の川と水辺の事典、柏書房、2003
- 4) たとえば、法政大学大学院エコ地域デザイン研究所水辺都市研究会東京編、江戸・東京臨海部における水辺空間の変遷に関する一連の研究・2005年度活動中間報告、2005
- 5) 橋本政子・堀繁、江戸の河岸における水辺のデザインとその規範に関する研究、都市計画学会論文集 No. 32, pp. 283-288, 1997
- 6) 須藤順平・渡部一二、広重の描いた『名所江戸百景』にみる水辺空間の構成に関する研究、ランドスケープ研究 69(5), pp. 725-730, 2006
- 7) 樋口忠彦・杉山公彦、明治期東京の名所の変遷過程について一名所絵を対象にして一、昭和 57 年度 第 17 回日本都

市計画学会学術研究発表会論文集, pp. 511-516, 1982

- 8) 大宮直記・下村彰男・熊谷洋一、名所図会・百景にみる近代以降の東京における「景」の変遷に関する研究、ランドスケープ研究 58 (4), pp. 429-437, 1995
- 9) 馬木知子、名所本にみる近代東京の都市風景の変容について、ランドスケープ研究 67 (5), pp. 623-628, 2004
- 10) 羽生冬佳、明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究、ランドスケープ研究 68 (5), pp. 843-848, 2005
- 11) 国土地理院発行 大正 8 年測量 20 万分の 1 地勢図より作成
- 12) 国土地理院発行 昭和 9 年測量 20 万分の 1 地勢図より作成
- 13) 国土地理院発行 平成 9 年測量 20 万分の 1 地勢図より作成
- 14) 弁慶橋は初めて描かれるのが明治 44 年であり、戦前期に区分されるが、その絵図の内容から、明治期の特性を継承していると判断し、4 章での分析対象とした。また 3 期すべてに描かれている場所には他に深川木場があるが、各時代に 1, 2 枚しかないため、分析が困難であると判断して分析対象から除外した。
- 15) 日本地図選集刊行委員会企画編集、明治二十年内務省実測東京五千分ノ一、人文社、1969 より作成
- 16) 人文社編集部編、東京市十五区番地界入地図：明治四十年調査、人文社、1986 より作成
- 17) 井口悦男編、帝都地形図 1922-47、之潮、2005 より作成
- 18) 東京都 2500 デジタルマップ電子地図、東京デジタルマップ株式会社、2005 より作成
- 19) 橋の架橋時期など要素の履歴は次の文献を参照して作成した。以下発行年次順に示す。鉄道会、御茶ノ水両国間高架線建設概要、鉄道省、1932 / 帝都高速度交通営団運輸課監修、折込広告社・春光社・インターナショナル宣伝企画編集、新地下鉄誕生 御茶ノ水池袋、折込広告社、1954 / 魚河岸百年編纂委員会、魚河岸百年、日刊食料新聞社、1968 / 石川悌二、東京の橋 生きている東京の歴史、新人物往来社、1977 / 伊東孝、東京の橋 一水辺の都市景観、鹿島出版会、1986 / 坂田正次、江戸東京の神田川、論創社、1987 / 首都高速道路公団監修、首都高速道路の構造、財団法人首都高速道路技術センター、1988 / 中央区教育委員会社会教育課文化財係編、中央区の橋・橋詰広場 中央区文化財調査報告書第5集、1998
- 20) なおもう一点分析対象とした資料媒体の変化による影響も考えられるが、この点について本論文では2(2)b)で述べたように課題を認識した上で一定の位置づけを与える対応をとっている。
- 21) 次の文献・地図を参照して作成した。前掲3) pp. 359-443 / 前掲17) / 四谷見附橋研究会編著、ネオ・バロックの灯 四谷見附物語、技報堂出版、p. 163, 1988

(2006.10.16 受付)